

現代農業で紹介されたケイ酸肥料【土若くん】

現代農業(2012年1月号)の記事に、ケイ酸が稲の増収と成長促進に貢献するという研究結果が掲載され、野矢商店の【土若くん】が紹介されました。

○同様の効能がある商品として【とれっちゃ】【米助(よねすけ)】も取り扱っております。【米助】につきましては、畑作や果樹にもお使いいただけます。



現代農業 表紙

P127 からの「ケイ酸で超多収イネを見た」より抜粋。

本当!? 「ケイ酸で超多収」

学校田

1次枝梗 11本
モミ数 114粒

近くの田んぼ

1次枝梗 9本
モミ数 105粒

それからこんなエピソードもある。二〇〇九年以来、地元のJA須高には高校で使う「美田」の問い合わせが殺到した。そこで、農協でも実験圃場に美田を須坂園芸高校の二倍の量(ケイ酸成分にして50kg)を施用したのだが、増収効果はわずかだったという。中嶋先生はそれらのイネを実際に調べたわけではないのだが、思うほど増取しないのは、「ケイ酸を大量に施用しても、ケイ酸を吸収していないのではないか」とみている。

超多収した学校田のイネの茎や葉に含まれるケイ酸は幼穂形成期で一二%。それが穂揃い期には一四%に上がり、収穫期にはなんと最高二五%にもなるというのだ。これは、中嶋先生にいわせると「常識では考えられない数値」。国や県で行なったケイ酸施用試験の結果をみても、一〇%前後がふつうだそう。

この違いはなぜなのか。条件として、中嶋先生がいまのところ思い当たるのは、田植え時期の違いだという。周囲が五月上旬~中旬にかけて田植えをするのに対して、学校田では授業の都合で五月下旬。気温が上がる頃に田植えすれば、苗はスムーズに活着する。消耗が少ないイネのほうがケイ酸をよく吸うという理屈だそうだが、それだけでケイ酸の吸収率が倍以上にも増えるものだろうか。

次ページからの記事では、須坂園芸高校の事例を研究者にぶつけて、超多収の秘密に少しでも迫ってみたい。

JA須高のオリジナルケイ酸肥料「美田」。成分は可溶性ケイ酸25%、ク溶性のリン酸5%、カリ7%、苦土4.9%、マンガン1.4%。「美田」は県外から購入できないが、同じような成分で、市販されているものでは「土若くん」(問い合わせ先:TEL0748-23-5588 野矢商店)などがある

1株の中でいちばん大きい穂を比較。どちらも穂首節から枝梗が出ており、不稔はかなり少ない。学校田のほうが穂数も1穂モミ数も多いが、登熟は変わらない

稲作・水田活用 (132)

現代農業 2012.1 (132)